

# 静岡県地域史研究会報

—静岡県地域史研究会—

徳川家康が慶長年間に展開した国際外交は、駿府にたびたび外国の使節を迎えた。東アジアの朝鮮・琉球、ヨーロッパのスペイン（メキシコ、マニラ）・ポルトガル（マカオ）・オランダ・イギリスなどである。

さらに『当代記』には、慶長十三年（一六〇八）十二月のことをとして、「バンチヤア国より以使者、駿府大御所江令音信、大御所しやうぎに腰を掛け、彼使者有対面、是は船着島、商舶往来地也」という記事がある。すなわち、家康が「バンチヤア国」から派遣された使者と床几に座して会見したとの内容である。

この「バンチヤア国」については、ジャワ島のバンテン王国の転訛とする説「バンツア」（人の意）を自称していた台湾東部のアミ族とする説がある。

但し、家康は慶長十四年二月頃に台湾の使者不参を理由として、肥前有馬氏に出兵を命じている。前年にアミ族の使者と会見していたならば、かかる理由は示されないはずである。

よつて、現段階ではバンテン王国、あるいはボルネオ島南部のバンジヤル王国の可能性が高いように感じられる。当時、東以使者、駿府大御所江令音信、大御所しやうぎに腰を掛け、彼使者有対面、是は船着島、商舶往来地也」という表現と合致する。

また、ジャワ島とボルネオ島にも及んでおり、「船着島、商舶往来地」という表現と合致する。

は、ジャワ島とボルネオ島にも及んでおり、「船着島、商舶往来地」という表現と合致する。

康と「バンチヤア国」の使者の会見には、イスラム教徒との折衝について、相応のノウハウを有するアダムスも関与していたと推測してみたとしても、極端な勇み足ではないだろう。

いずれにしても、家康が手がけた国際外交については、東アジアやヨーロッパとの関係などまらず、イスラム世界も含めた、より広い視野から検証する必要があると見込まれる。

## 「バンチヤア国」の使者

小川 雄

## 例会要旨

十二月例会

静岡市歴史博物館講座室  
十二月一日(土)(七名参加)  
近世における駿府城の実像

増田亜矢乃

駿府には駿府城・久能山東照宮のほか、宝台院、華陽院、静岡浅間神社など徳川将軍家ゆかりの寺社が多く存在する。先行研究は近世初頭の駿府城、久能山東照宮の修築造営を中心に行つており、直轄地になつて以降はあまり触れられていない。直轄地になつて以降も建築物の管理は依然駿府に赴任した役人たちに課された重要業務であり、管理状況・体制の把握は直轄地としての駿府の状況を把握することにつながると考える。

本報告では、上記の問題関心から寛永期以降に駿府で建築物の維持管理を担当した組織、そして享和期・文化期頃の駿府城の状況について考察した。

駿府城は慶長十二(一六〇七)

年に公儀普請によつて修築され、その後地震などの被害を受けた際は幕府から命を受けた大名が手伝い普請を行つた。しかし、日常的にも建築物の維持管理は必要であり、これを担当したのが駿府破損奉行であつた。

『駿国雑志』によると寛永十六(一六三九)年の在番(駿府城内警備隊、大番のち書院番から配属)設置以降、在番から輩出されている。寛永期には通常管理を担う破損奉行2名のほか、宝台院や久能山東照宮で修復が必要になつたときには増員が行われたとされ、宝永期まで任命者があげられるが詳細はつかめない。

このようなかつ享和三(一八〇三)年に勤番組で駿府武具奉行をつとめていた榎原平兵衛が兼帶で破損奉行に任命された。これは前年から城代・町奉行によつて進められていた静岡浅間神社の再建と駿府城の大規模修

理による措置であつた。破損奉行のもとには城代・定番・町奉行から、それぞれ与力一名・同心三名が出され組織された。建築工事という専門的かつ経験が必要な仕事であり、また膨大で長期にわたる工事が見込まれたからか、彼らは長期にわたりこの職をつとめた。

静岡浅間神社の造営と同時期に幕府に申請された駿府城の修築は、享和2年から交渉が行われ翌年に許可、そして文化元(一八〇四)年に工事が始められた。申請にあたり城代・町奉行が提出した書類には、本丸御殿の屋根の雨漏り・柱の湾曲、坤櫓の大破、草深御門の橋の朽ち落ち、二ノ丸御門櫓の大破などの状況が記載され、城内全域の建築物が限界を迎えていたことがうかがえる。ここまで放置された要因としては資金面の問題があつたようで、近世初頭より幕府から無制限に出されていた工事資

理による措置であつた。破損奉行のもとには城代・定番・町奉行から、それぞれ与力一名・同心三名が出され組織された。建築工事という専門的かつ経験が必要な仕事であり、また膨大で長期にわたる工事が見込まれたからか、彼らは長期にわたりこの職をつとめた。

静岡浅間神社の造営と同時期に幕府に申請された駿府城の修築は、享和2年から交渉が行われ翌年に許可、そして文化元(一八〇四)年に工事が始められた。申請にあたり城代・町奉行が提出した書類には、本丸御殿の屋根の雨漏り・柱の湾曲、坤櫓の大破、草深御門の橋の朽ち落ち、二ノ丸御門櫓の大破などの状況が記載され、城内全域の建築物が限界を迎えていたことがうかがえる。ここまで放置された要因としては資金面の問題があつたようで、近世初頭より幕府から無制限に出されていた工事資

一月例会  
一月二十七日(土)(八名参加)

静岡労政会館五階第二会議室  
駿府・清水の米蔵

柴 雅房

本報告は、「駿府御蔵方年中行事・駿府御代官所資料」や天

保六、七年に作成された「駿府御藏御詰米御用留」など、これまであまり活用されなかつた史料に基づき、駿府・清水米藏の実態について明らかにしたものである。両藏は「幕府御藏」（直轄地の年貢米を収納した幕府直営の米藏）の一つである。幕府御藏については飯島千秋氏の先行研究がある。

### 一 駿府御藏について

駿府御藏には城内御藏（六棟十一戸）と紺屋御藏（一棟二戸）がある。城内御藏は駿府城二の丸内にあり、東御門の北脇から内堀に続く水路際までの地区を占めている。静岡市の発掘調査により、米藏の規模、位置（方向）が確認された。堀沿いの多聞櫓にも米が収蔵されていたことが判明している。紺屋御藏の所在については特定できないが、紺屋町の駿府代官所近くにあつたものと考えられる。

○七）家康の駿府入城の際には城内に設置されていたものと思われる。紺屋御藏は寛文元年（一六六一）に設置されたとの記録がある。米の出納はいざれも代官が担当した。

収蔵米の用途は駿府諸役人の俸禄と備蓄米である。俸禄米は原則的に、城内御藏からは城内関係役人あてに、紺屋御藏からは城外関連役人あてに払い下げられたようだ。城内御藏に納められた備蓄米の貯蔵量は基本的に一万俵。天明三年（一七八三）、文政八年（一八二五）には浅草御藏への補填のために廻送されている。寛政元年（一七八九）からは飢饉に備え、甲州米による糲詰となつた。

### 二 清水御藏

収蔵米は村々から納められた年貢米である。安永頃と思われる史料によれば、駿府代官がその年に必要な米高を算定した上で、自らの支配地の村々に割り

○七）家康の駿府入城の際には城内に設置されていたものと思われる。紺屋御藏は寛文元年（一六六一）に設置されたとの記録がある。米の出納はいざれも代官が担当した。

御藏から放出される俸禄米（蔵出米）は、市場の狭い駿府にとつては重要な米の供給源であつた。蔵出米の減少は米価高騰を招き、町人の飢えに直結した。「駿府御藏御詰米御用留」

からは、天保七年（一八三六）、代官の指示の下、蔵出米を買い集める米商人たちの行動が、飢えに苦しむ町人から買い占めと誤解され、糾弾される状況が記されている。寛政元年（一七八九）から古米は江戸廻米か入札で地主に廻送された。天明三年には駿府御藏同様江戸に廻送された。天明七年（一七八七）の駿府の打ちこわしに際には、播磨屋作右衛門手代弥兵衛が清水御藏の詰米を持ち出し、米五十俵を安売りしたこと

三二）の西国蝗害被害に際し、大坂城などから西国へ送られた米の返済先の一つとして設置された。建設を進めたのは当時の川代官の伊豆国支配地に割り当てた。

御藏から放出される俸禄米（蔵出米）は、市場の狭い駿府にとつては重要な米の供給源であつた。蔵出米の減少は米価高騰を招き、町人の飢えに直結した。「駿府御藏御詰米御用留」からは、天保七年（一八三六）、代官の指示の下、蔵出米を買い集める米商人たちの行動が、飢えに苦しむ町人から買い占めと誤解され、糾弾される状況が記されている。

清水御藏は常念寺川沿いにあり、棟数は六棟（十八戸）。蔵敷地内には船を近づけるための掘割と水門が設けられていた。清水御藏は享保十七年（一七七二）

当て、不足の場合は島田代官、江川代官の駿河・甲斐国支配地に割り当てている。さらに不足した場合は、遠州中泉代官、江川代官の伊豆国支配地に割り当てた。

御藏から放出される俸禄米（蔵出米）は、市場の狭い駿府にとつては重要な米の供給源であつた。蔵出米の減少は米価高騰を招き、町人の飢えに直結した。「駿府御藏御詰米御用留」からは、天保七年（一八三六）、代官の指示の下、蔵出米を買い集める米商人たちの行動が、飢えに苦しむ町人から買い占めと誤解され、糾弾される状況が記されている。

貯蔵量は文化・文政期には駿府御藏と合わせて糲二万石が貯蔵されていたとされる。用途は飢饉等に備えた備蓄米である。古くなつた米のみ新米に詰め替え、古米は江戸廻米か入札で地主に廻送された。天明三年には駿府御藏同様江戸に廻送された。天明七年（一七八七）の駿府の打ちこわしに際には、播磨屋作右衛門手代弥兵衛が清水御藏の詰米を持ち出し、米五十俵を安売りしたこと

が判明。財産没収の上闕所処分となつている。寛政元年には駿府御藏同様甲州米による糲詰となつた。天保八年（一八三七）、

文久元年（一八六二）慶応二年

(一八六六)には米不足等の理由で駿府の町などに払い下げられている。

とお二人決まっています。報告希望の方は、六月か七月になりますので、早めに連絡ください。森田の方で調整します。

なお、五月の廣田報告は、企画展示で今川氏を扱うことから、その関連の報告の予定だそうです。

二、歴史随想の原稿募集  
報告者の希望と相反して、歴史随想のストックがなくなりました。県内の内容で書ける方はぜひ投稿願います。

三、会誌への投稿依頼  
会誌一四号への投稿をお願いします。今年より締め切りを三月末としました。投稿ご希望の方は、早めの投稿をお願いします。

四、原田千尋氏の著書紹介  
昨年末に会員の原田千尋氏が著書『今川義元 守護大名から戦国大名へ』を出版されました。地域史研究会で報告され、会誌に投稿されたものや、歴史随想

に書かれたものが多く収載されています。

いざれ書評会を行う予定ですが、原田氏のご厚意で、希望の方には献本いただけるそうです。で、もし希望される方は、事務局森田がまとめますので、ご連絡ください。

【例会案内】

☆ 三月例会

一、日 時 三月一日(土)

午後三時

二、会 場

静岡県教育会館地階 D 会議室

三、報告者及び報告名

「近世玉領の廻采制度について」廻船  
差配人の動向を中心にして 柴 雅房氏

例年ならば卒業論文発表会でしたが、今年は学生の都合がつかず、通常報告となりました。ご了承ください。さらに報告者の柴氏には一月に続いて報告していただきました。

【事務局より】

一、報告について

例年より報告者の希望が多く、四月は三島市の平林氏、五月は静岡市歴史博物館の廣田氏

静岡県地域史研究会報  
第253号  
2024年2月15日発行

静岡県地域史研究会

会長 小和田哲男

事務局長 森田香司(053)449-5711

会計担当 北村 啓(090)4230-6530

〔会費納入先〕

北村啓気付

郵便振替口座 00880-3-63062

年会費 4000円(次年度より 3000円)